## 日本・カナダ 女性研究者 交流事業

# 日本・カナダ女性研究者 交流事業参加レポート2



をとう 佐藤たまき 東京学芸大学教育学部准教授 専門:古脊椎動物学

## 1 はじめに

日本・カナダ女性研究者交流事業は、日本学術会議とカナダ王立協会が両国の女性研究者の育成や活躍を目指して研究交流や講演を行うプログラムである。私は本事業により2009年2月28日から10日間カナダに派遣され、交流を通じて非常に充実した時間を過ごすことができたので、その内容について以下にご報告したい。

私がこの交流事業に応募した理由は二つあった。 一つは、カナダにおける博物館教育について学ぶためである。恐竜を含む専門のせいか博物館での展示や講演に係わる機会が非常に多いため、この分野の研究が盛んなカナダにおける博物館教育について知りたい、という動機があった。もう一つの理由は、どのような仕組みが女性の社会進出を支えているのか、進出が進んでいる国で現場の声を聞いてみたいと思ったからである。カナダへ留学した経験を持っている私ではあるが、こうした視点を意識して行っ た今回の訪問では様々な新知見に恵まれた。

アルバータ州エドモントンとオンタリオ州オタワ及び川向いのケベック州ガティノーの多くの機関を巡る非常に慌ただしい旅程ではあったが、関係者のご協力のおかげで無事に全日程を予定どおりにこなすことができた。

### 2 アルバータ州エドモントン

- 訪問先:-

Royal Alberta Museum(RAM、州立の自然史博物館)

University of Alberta (UA、州立大学)
Telus World of Science (TWS、私立の科学博物館)

W. P. Wagner School of Science and Technology (WS、州立高校)

2月28日午後にエドモントンに到着し、UA教授で恐竜研究の世界的権威であるDr. Philip Currie夫妻の御厚意により、滞在中はご自宅に泊めていただいた。実は私が同州のカルガリー大学博士課程に在籍中には、当時近くの博物館にいらっしゃったDr. Currieには大変お世話になり、下宿までさせていただいていた間柄である。到着日にはご夫妻が出張のため、下宿しているUAの学部4年生の宮下哲人君

86 学術の動向 2009.8



写真1:RAMにて、水滴中の生物の拡大模型

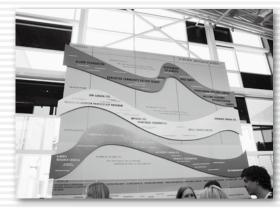


写真2:TWSへの寄付者の掲示

とポスドクのDr. Eric Sniverlyがお世話下さった。

翌日の午前中は、RAMの展示を見学した。この博物館は精巧なジオラマなどの立体的な展示が多く、見学者が触れる標本(例えば、ビーバーの頭蓋骨の実寸模型や実物の尾)もあちこちに置いてある。また、水滴に含まれる生物(プランクトン、花粉、カビなど)を拡大した模型(写真1)や、死骸が分解される過程の模型など、あまりのリアルさに観客が悲鳴をあげて逃げそうな展示がいくつもあったが、実際には老若男女を問わず面白がっているようであった。

その後、UAのポスドクのDr. Erin Maxwellが 院生のMss. Victoria Arbour, Robin Sissons, Lisa Buckleyと私の合計5人の昼食会を開いて下さっ た。女性だけでこれだけの人数が集まるというだけ でも、古脊椎動物学がカナダでは非常に人気があり、 専門家を志す女性が多いことがよくわかる。最高気 温が氷点下という天候も何のその、大学から徒歩で レストランに向かう途中から話が盛り上がった。研 究を志したきっかけについて尋ねると、子供の頃か ら恐竜が好きだったという人と、大学で勉強してい る時にセミナーや講演会で話を聞いて興味を持った という人の、半々に分かれた。進路の選択や実際 の研究生活を通じて性差別があるか尋ねてみると、 まったくないわけではなかったが、悩みの種という よりは笑い話の種になっていた。しかし、同じ言動 でも受け取り手の感じ方が違うこともあるなど、考

えさせられることもあった。

昼食会の後に行ったTWSでは入場券売り場に長い行列ができていた。地元の電話会社Telusをはじめ様々な企業や団体、個人の寄付を受けて運営されている博物館であり、入口正面のボードに寄付者がリストされている(写真2)。展示は人体・宇宙技術・犯罪捜査などに分かれており、館全体が統一したテーマを持つのではなく、社会の関心が高い分野を選んでギャラリーを独立させている。見学者が操作する展示が多く、大人も子供も楽しめる。ピタゴラスの定理をパズルで示したもの(写真3)と、刺激に対してボタンを押すことで反射速度を測る設備が印象に残った。

夜はUAの大学院生である小西卓也君夫妻と宮下君、私の4人で夕食に出かけた。日本人で爬虫類の古脊椎動物学を志す学生には留学する人が多く、そういう意味で小西君と宮下君は私の後輩にあたる。就職難や研究テーマ探しなどの万国共通の問題に加えて留学生ならではの苦労はあっても、研究の本場で憧れの学問に没頭する喜びは何にも代えがたい、というのが共通の認識であるようである。

翌朝は生物科学科の学科長で化石海生爬虫類研究の権威であるDr. Michael Caldwellに、古脊椎動物学の研究者や研究施設をご案内頂いた。この大学には古脊椎動物学だけで大学院生が17人もいるという大所帯で、施設やリソースの充実ぶりには目を見張るものがある。そして、私の研究について講演を

学術の動向 2009.8 87



写真3:TWSにて、ピタゴラスの定理のパズル



写真4:UAにて講演、Dr. Caldwell(右、正面)と Dr. Currie(左、後ろ姿)

行った(写真4)後で、Dr. Currie夫妻など数名と 私を昼食会に招待して下さった。

午後は副理学部長のDr. M.-A. ArmourにWSま でご一緒いただいた。Dr. Armourのご専門は化学 で、UAで女性研究者の比率を上げる運動を行って いるグループ(WISEST)の創始者の一人でもある と同時に、出前授業など通じて科学への興味を引き 出す活動にも力を入れていらっしゃる。WSはもと もと職業訓練校であったが、十数年前にシステムを 大きく変え、理系の科目に力を入れるようになった とのことであった。進学に力を入れていると同時 に、進学しない生徒向けの授業もあるなど、様々な カリキュラムを組めるようになっている。公立の学 校で制服もなく、ごく普通のファッションから虹色 のモヒカンまで、生徒の格好は実に多様であった。 化学教師のMs. M. B. Cookeのご案内で校長に御挨 拶した後、Ms. M. Prokopによる化学の授業を見学 させていただいた。実験を主体とした授業で、一般 家庭にある様々な物質が机の上に並べられていた。 その後で化学の Ms. J. McMaster の教室で生徒向け の講演をしたが、近く古生物博物館に行く予定があ るので興味を持ってもらえたようである。更に幾つ かの教室を見学した後、Dr. Armourと理科主任で あるMr. G. Haak、特に優秀な生徒のためのプログ ラムを担当するMr. M. BergeからWSの特色につ いて伺った (写真5)。この学校の理科の先生の多 くは教育学士と理学士の両方を持っているとのこと

である。また、「何を教えるか」ということについてはなるべく個々の生徒の希望に合わせるようなカリキュラムの柔軟性を重視しているとのことであった。WSを辞してからUAに戻り、短い時間ではあったがWISESTの啓蒙活動についてMs. Grace Ennisから女子生徒向けのプログラムや発表会などについてお話を伺った。夜はDr. Currie宅で手料理をごちそうになりながら夜が更けるまで話が盛り上がった。

#### **ろ** オンタリオ州オタワ及び ケベック州ガティノー

#### - 訪問先 : -

Ashbury College(AC、私立学校、小中高) 日本大使館

Canadian Museum of Science and Technology (CMST、国立科学技術博物館)

Carleton University (CU、州立大学)

Canadian Museum of Civilization(CMC、国立歷史博物館)

Royal Society of Canada (RSC、カナダ王立協会) University of Ottawa (UO、州立大学)

Canadian Museum of Nature (CMN、国立自 然博物館)

3月3日の夕方にオタワ空港に到着すると、お出

88 学術の動向 2009.8



写真 5:WS にて、Dr. Armour (左) と Mr. Haak (右) とご一緒に



写真 6:ACで高校生向けの講演、Mr. Gilmore (左) にご紹介いただく

迎えに来て下さったRSCのMs. M.-L. Renaudが宿 泊先までご案内下さった。ホテルにはRSCのMr. D. Gilmoreがいらっしゃり、本交流事業で派遣された 聖マリアンナ医科大学の増子佳世先生と夕食をご一 緒できるようお手配下さった。増子先生は滞在最終 日でお疲れにも関わらず、ご専門分野などについて いろいろお話下さり、楽しいひと時であった。

翌朝はMs. RenaudとMr. Gilmoreにご一緒いただいてACを訪問し、生物学教師であるMs. Hallに礼拝堂や教室や体育館など、様々な設備を見せていただきながら学校の歴史についてご説明いただいた。ここは私立のキリスト教系の学校で、小学校は男子校であるが中高は共学である。生徒は制服で先生も全員がスーツ姿であるが、教室には担当の先生の個性が反映されて水槽や写真や観葉植物などが置いてある。また、すべての教師が課外活動の顧問を務め、Ms. Hallはダンスを教えていらっしゃるとのことであった。高校生向けに1時間の講演を3回行ったが(写真6)、どのクラスも様々な質問が出て、中には古生物学者を目指しているという生徒もいた。

午後は日本大使館で橋爪淳一等書記官にお目にかかり、かねてから興味を持っていた日本人留学生数についての統計や、カナダから日本への訪問プログラムについてご説明いただいた。また、開催中の写真展をご案内いただき、日加関係の歴史的な写真を拝見した。その後でCMSTを見学したが、ここも

エドモントンのTWS同様にボタンを押したりしながら楽しめる展示が多かった。電話を発明したグラハム・ベルや宇宙ステーションの作業用アームなど、カナダ人の業績の紹介に広いスペースが充てられていたが、通信の発達についての展示(写真7)では冷戦時代に準備された国民向け核攻撃警報を聞くことができ、カナダが米ソに挟まれた国であることを実感した。ちなみに、英語圏のオンタリオ州とフランス語圏のケベック州の境界という土地柄か、この地域の公共施設の表示やスタッフは徹底してバイリンガルである。

翌日の午前中もM.-L. Renaudに付き添っていただき、CUを訪問した。生化学がご専門のDr. J. Storeyが生物の凍結を研究する研究室をご案内下さったのち、地球科学科のDr. C. Schroeder-Adamsの研究室で大学の研究環境について話しこんだ。その後、Dr. Storeyと生物学科のDr. S. HepworthとDr. N. Cappuccinoに、家庭と仕事の両立についていろいろ伺った(写真8)。お三方とも母親としてデイケアの確保や費用などの苦労話を聞かせて下さったが、産休や育休中には非常勤が雇われ、授業時間に配慮がなされるなどのシステムが確立されており、「子育てに理解がある職場」とはっきり言い切っていらっしゃった。

午後にはCMCのプログラムマネージャーである Ms. M. Wardに教育用プログラムなどについて伺ってから展示を見学した。この博物館には1年間に5

学術の動向 2009.8 89

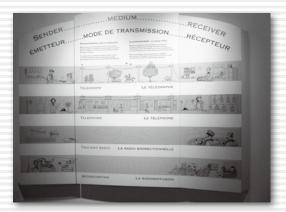


写真7:CMSTの展示、二ヶ国語表記が徹底され ている



写真8: CUの女性研究者に家庭と仕事の両立についていろいろ伺った

万人近くの生徒が団体で見学に来るそうで、夏の キャンプやワークショップなどのプログラムも提 供している。職員の男女比率は女性が男性の2倍近 く、母親にも働きやすい環境であるとのことである。 Ms. Wardお薦めのカナダの原住民とその歴史につ いての展示は、空間的に規模が大きい上に(写真9) 展示物も部族の多様性を反映しており、時間の制約 で駆け足で回らなければならないのが残念でならな かった。その後RSCにお邪魔して一休みしてから UOに向かい、女性研究者の比率を上げる活動をし ているグループ (WISE) のオタワ支部のご招待で 講演を行った。ご紹介下さったRSC FellowのDr. H. Alperをはじめ、男性を含む多くの方が来て下さっ た(写真10)。講演後にはレセプションがあり、工 学や史学などの分野の女性大学教員を中心に、いろ いろな方とお話しする機会を頂いた。留学生や来日 経験のある方、外国からの訪問研究者もいて、実に 国際色豊かであった。

翌日はCMNを訪問したが、私は数年前に日本学術振興会の海外特別研究員として滞在するなど何度か来ているため、顔見知りのスタッフに「また来た!」とからかわれるほどである。午前中は教育部門にお邪魔し、アシスタントマネージャーのMr. J. Kubicekに教育プログラム運営について伺い、教育スタッフのMss. M. Bouse, S. Allysonが生態系についての小学校高学年向けプログラムと、恐竜の展示を用いた低学年向けプログラムを実演して下さっ

た(写真11)。それから研究部門で海外特別研究員の受入研究者であったDr. X.-c. Wuにご紹介いただいて講演した(写真12)。他分野の研究者から斬新な質問もいただき、狭い分野に閉じこもりがちな研究者として目の覚める思いもした。昼食の後で、夏に予定している共同野外調査について打ち合わせを行った。研究部のDr. S. Cumbaa, Mr. R. Dayのお二人はこの地域での長い経験があり、貴重な助言を下さった。

続く土日もCMNの研究部にお邪魔し、標本の観察やデータを取らせていただいた。また、北極圏の哺乳類化石を研究しているDr. N. Rybczynski, Dr. Wu、彼の日本人ポスドクの田上響君と4人で昼食に出かけ、研究や留学の話題に花を咲かせたりした。博物館で日曜の夕方まで粘っていたために荷造りは大変なことになったが、なんとか間に合って月曜早朝の飛行機で帰国の途に就くことができた。

## $m{4}$ おわりに

どの機関でも研究・教育の現場に立つスタッフには苦労はあっても楽しそうで、それぞれが自信を持ちつつも常に改善に向けて努力されている様子が非常に印象的であった。博物館の展示には見学者が操作するものが数多くあり、「見る」だけではない工夫がなされていた。教育プログラムも学校で教える

90 学術の動向 2009.8



写真9:CMCの展示は規模が大きい



内容とのリンクを意識したものがあり、学校の授業の一環として利用しやすいのではないかと思う。また、日本では女性が圧倒的少数派のようなエリアでもカナダでは女性の比率が高く、それでも更なる改善に向けて活動する姿勢には感心させられた。社会の変化や挑戦に積極的に対応し、言語や人種による違いに配慮を欠かさないなど、日本とは比較にならない多様性を当たり前のこととして受け入れているカナダという国のおおらかさに改めて感銘を受けた。



写真11: CMN にて、Ms. Bouse による教育プログ ラムの実演

## 5謝辞

今回の交流事業に参加する機会を与えて下さった 日本学術会議の金澤一郎会長とお茶の水女子大学の 室伏きみ子教授、Royal Society of CanadaのYvan Guindon会長に厚く御礼申し上げる。これほどまで に充実した訪問になったのも、本文にお名前を挙げ させて頂いた方々に加え、関連機関の様々なスタッ フにお手配・お気遣いいただいたおかげである。特 に、日本学術会議事務局の田宮房枝様とカナダ王立 協会のMs. Anna Bucekには、訪問に関する実務的 な手続きについて大変お世話になった。この交流プ ログラムを支えて下さった日加両国の多くの皆様に 心から感謝する。



写真12: CMNにて講演、Dr. Wuにご紹介いただく

学術の動向 2009.8 91